

実践研究報告書

南国市日章小学校

教諭 小松昭範

1 はじめに

今年度担当した学級は、第6学年36名（男子20名、女子16名）のクラスである。本学級の児童は英語教育強化拠点事業のもと低学年より英語学習に慣れ親しんできており、第1学年から第3学年までは週1時間の外国語活動、第4学年から週2時間の英語科の授業を受けてきている。今回は、本学級で1年間を通して行った英語科指導の中から、特に「文字指導」について焦点を当てて報告を行う。

2 取り組み

(1) 意識調査

4月当初、まずは英語の文字に対して児童がどのような意識を持っているかを調査する必要があると感じ、アンケートを実施した。主な結果は以下の通りである。

- ① 英語の文字や単語を書くことが楽しい・・・67%
- ② 英語の文字や単語を読むことが楽しい・・・72%
- ③ もっと英語を書けるようになりたい・・・96%
- ④ もっと英語を読めるようになりたい・・・96%

この結果から文字に対する関心・意欲は十分に高まっていることが明らかとなり、文字学習を導入する際に必要な意欲面の素地ができていることが分かった。そのため、本年度はこの意欲を維持しつつ、児童が楽しいと感じながらも、書く力・読む力の向上を図る指導を継続的に行っていくことをねらいとして、研究を行った。

(2) 文字指導を組み入れた授業づくり

【フォニックス読みの導入】

アルファベットの名前読みからの脱却を図るべく、各アルファベットの音読み（フォニックス）を意識付けするための指導を行った。まず、絵カードを用いて各アルファベットの音から始まる身近な単語をリピートし、名前読みと音読みとの区別を図った。発音についてはネイティブに近い音を聞かせるように、ALTや英語支援員に協力をしていただいた。次に、フォニックスソングを歌い、リズムに乗せて楽しく覚えられるようにした。その際、視聴覚機器を用いることで児童の意欲が高まり、主体的に学習できていたように思う。これらの取り組みは、4月当初から5月頃まで継続して取り組んだ。



【新出単語を導入する際の工夫】

フォニックス読みの学習後、新出単語を学習する際に、児童に読み方を予測させる活動を取り入れた。アルファベットの1文字1音の学習のみで単語の読みをすべて網羅することは不可能であるが、部分的に当てはめて読むことは可能である。児童は「なんとなくこう読むんじゃないかな」と言いながら、自主的に読んでみようとする姿が見られた。漠然としながらも分析的に単語を捉え、発音につなげようと

していた。

【書く活動の定着化】

各単元の終末には、学習した英語表現の一部を文章化して書く活動を継続的に行った。その際、英語が苦手な児童はアルファベットを使って書くということが困難であるので、「I want to watch ○○.」や「We have ○○.」のように文章の大半はなぞり書きできるようにしておき、○○に当てはまる言葉のみを自分で選んで書き込むよう配慮にした。また、アルファベットを用いて4本線の上を書くということも不慣れであるため、書く作業を行う前には必ず書き方の例を拡大提示しておき、初めの文字を大文字にすることや、文字の大きさ、単語と単語との間隔を空けることなどを適宜指導してきた。これらの活動を続けていくうちに、「こんな表現も書きたい」「こんな言葉を使いたい」等の意欲的な声も見られ始め、電子辞書を使って調べたり ALT に尋ねたりしながら、思い思いの文章を書くようになった。

【絵本のなぞり読み】

2学期からはスモールブックを活用した絵本のなぞり読みに取り組んだ。文字と音との基礎的な関係を学ぶフォニックスとは対照的に、絵本のなぞり読みは文章全体を1つのまとまりと捉えて文字を学ぶトップダウン的な手法である。一つ一つの単語に注目するわけではないので、曖昧性に耐える力が重要になってくる。そのため、少しでも児童の意欲を高めるために、視覚的に見て楽しい内容の絵本を選ぶことや、読むスピードを調節するなどの工夫を取り入れた。また、スモールブックの拡大版であるビッグブックを前に提示して、どこをなぞっているかが視覚的に分かるようにした。基本的な学習の流れは、①ALTによる読み聞かせ、②ALTのあとについて絵本を読み、③ALTのあとについてなぞり読みである。始めは難しそうな様子を見せる児童が多かったが、回数をこなすうちにスピードに慣れ、「別の絵本でもやってみたい」という声も出てくるようになった。



3 成果と課題

常に児童の意欲・関心に照らし合わせて指導の工夫を行うことで、継続的に文字学習に取り組むことができた。特に、「書きたい」「読みたい」という児童からの自発的な声が出たことと、自主的に電子辞書等を利用して文字を使おうとしている姿が見られたことは、この研究の成果であったといえる。ただし本年度はテスト形式で読む力・書く力を測ることはできなかったため、学習意欲と文字学習の定着の度合いがどの程度関連しているかという点を、これからさらに追究していく必要がある。

4 おわりに

発達段階を考慮するとフォニックスの音に楽しく慣れ親しむ活動は中学年が適しているため、その頃から複数年にわたって文字学習に取り組むことで、英語の文字に対する抵抗感を更に軽減することができると考える。「聞く・話す」の技能と同じように「読む・書く」の基礎的な技能もバランス良く身につけることで、継続的に英語を学ぶ力の土台を育てていきたい。